

# 方中履『切字釈疑』「啞上入」の条を読む （「切字釈疑」第6節訳注）

富平美波

## 1 はじめに

拙稿「方中履『切字釈疑』「等母配位」の条を読む（「切字釈疑」訳注1）」（『アジアの歴史と文化』第13輯）・「方中履『切字釈疑』「切韻当主音和」の条を読む（「切字釈疑」訳注2）」（『アジアの歴史と文化』第14輯）・「方中履『切字釈疑』「門法之非」の条を読む」（『山口大学文学会志』第61巻）・「方中履『切字釈疑』「字母増減」の条を読む（「切字釈疑」第4節訳注）」（『アジアの歴史と文化』第15輯）・「方中履『切字釈疑』「真庚能備各母異状」の条を読む（「切字釈疑」第5節訳注）」（『山口大学文学会志』第62巻）に続き、本稿では、続く第6節「啞上入」の部分について、本文の校合と訳注の作成を行い、内容について若干の考察を加える。

## 2 本文

第1節～第6節に引き続き、校合に使用したテキストは下記の5種類である。

〈底本〉

1988年7月江蘇広陵古籍刻印社が線装本で影印刊行した康熙年間汗青閣刻本『古今釈疑』の卷十七（「汗」と略称。）

〈校合に用いたテキスト〉

①『四庫全書存目叢書』第99冊（子部）『古今釈疑』（中国科学院図書館蔵清康熙汗青閣刻本影印）の卷十七（「存」と略称。）

②『続修四庫全書』第1145冊（子部）『古今釈疑』（中国科学院図書館蔵清康熙十八年楊霖刻本影印）の卷十七（「続」と略称。）

③1990年7月上海古籍出版社が道光世楷堂刊本を底本として影印刊行した『昭代叢書』の「丙集」に収められている「切字釈疑」（「昭」と略称。）

④1971年5月台湾学生書局が国立中央図書館蔵の旧鈔本を影印刊行した『古今釈疑（原題 授書隨筆）』の卷十六（「授」と略称。）

次に、底本に従って本文を掲げ、テキスト間で本文の字句に異同がある箇所には、括弧付きの

漢数字を付し、後に異同の内容を注記する。

本文を掲載するにあたって、割注と標点に関しては、下記の方法に従った。

- ・底本で割注であるものは、括弧でくくって記した。
- ・底本には点が施されているので、下記本文もそれに従って「。」を表示した。判読に苦しむ箇所は、適宜判断した。

## I 第6節「啞上去入」本文

### 啞上去入

古人平仄互通。但羸叶耳。沈約始定平上去入四聲。而周德清中原音韻。始分平聲爲陰陽。以空喉高聲爲陰。堂喉下聲爲陽。此前所未發。故三十六母。清從心邪。一列襟呼。而持蒸切澄。行韻混取。皆不知陰陽之故也。而論理者曰。輕清爲陽。重濁爲陰。則與挺齋相反矣。張世南謂衣冠平聲爲陰。着衣之衣。冠巾之冠。去聲爲陽。此經生附會之談。非知此道者也。挺齋見陰本字空喉。陽本字堂喉。但取例說。未詳其名之合理耳。要之法則一定。名則隨人所取也。聲原故以啞聲啞聲目之。如通字爲啞。同字爲啞。使人易解。猶言印章之陰陽文。何如言朱文白文之爲明切乎。自高安提出。李士龍音義便考。用之以并母。呂獨抱泰交韻。用之以立切。可謂善矣。但未通暢其所以然。而郝京山論平上去入之下。更有一聲。如崩鞞琫不幫是也。此乃歸母耳。不能定其必爲幫。或爲把。或爲奔。皆可。何如啞上去入之自然不移也。按西儒耳目資。亦以清濁上去入爲五聲。正與啞上去入闇合。蓋五音相生。爲宮徵商羽角。既生之後。則宮商角徵羽。其聲以次漸高。人之啞上去入。乃自然之宮商角徵羽。唇舌牙齒喉。則初排位立號之羽徵角商宮也。以啞起。以啞収。即京山之意。京山不言啞。而別贅一字。則似蛇足耳。近見翻刻中原韻者。強分上去入亦有陰陽。彼謂有送氣用力之別。若然。則何以處夫平聲之送氣用力。而又自有啞喉啞喉之陰陽乎。故標例曰啞。請問上去入有啞聲啞聲否耶。可爽然矣。惟入有起抑聲。各方言語不定。如莫沒佛合等字。皆起抑任意。考之古人。韻脚不分。切脚無據。遍搜歌謠箋註。俱無有可証明者。然按之今日。確有此音。當是開口齊齒之韻収抑入。合口之韻収起入。蓋入(一)爲極聲。聲極則轉。轉復爲平。黃鍾位子。自子而左旋。周十二律。貞下起元。必然之理。總之仄無餘聲。餘聲皆平(二)可悟五音皆宮。五聲皆平矣。故獨平有啞。 (三)而謂仄有陰陽者。鑿說也。履按啞平復有二聲。如逢長來茶之類。今中州吳下及敝鄉之音。皆高于啞平。(兒生(四)下地之聲爲哇。其音實高于啞平。萬國皆然。不獨中州吳下敝鄉之土音也。)但有音無字(五)其字即啞。猶入(六)之起聲無字。其字即抑。是三平上去二入共七

聲。用止用五。啞啞則不可不明耳。

## II テキスト間の異同

(一) (昭)は「入」を「人」に作る。

(二) (存)・(続)では「餘聲皆平」の後に句読点(丸)が刻されているようでもあるが、不明瞭である。

(三) (汗)は1字前の「啞」字の後に句読点(丸)を刻す。(存)・(続)は「啞」字の後にある。(存)・(続)の切り方のほうがふさわしいので、ここでは(存)・(続)に従った。

(四) (汗)は「生」を「三」に作る。(存)・(続)・(昭)・(授)は「生」に作る。ここでは(存)・(続)・(昭)・(授)に従った。

(五) (汗)は「音無字」の3字がなく、3字分のスペースが空白になっている。(存)・(続)・(昭)・(授)には空白はなく、「音無字」の3字が入っている。ここでは(存)・(続)・(昭)・(授)によって補った。

(六) (授)は「入」を「人」に作る。

## 3. 訳注

### I 和訳

啞啞上去入

古人の韻では平と仄とが互いに通押していた。ただ大まかに調和させるだけだったからである。沈約が初めて「平・上・去・入」の四声を定め、周徳清の『中原音韻』が初めて平声を「陰」と「陽」に分けた(1)。「空喉」の「高声」を「陰」とし「堂喉」の「下声」を「陽」としたのである。これはそれ以前には発見されていないことであった。だから三十六母では「清・従・心・邪」が同列に並べられているし、「澄」の反切を「持蒸切」とするなど、反切下字に「陰」・「陽」の字をまじえ用いている(2)。これらはみな、「陰陽」を知らないことが原因である。その上、理論家たちが、軽く清いものが「陽」で重く濁っているものが「陰」であるなどと言い、周徳清(号挺齋)の命名とは逆の事を述べてしまった。張世南は「衣冠」の「衣」や「冠」は平声でこれが「陰」であり、「着衣」の「衣」や「冠巾」の「冠」は去声でこれが「陽」であると言っている(3)が、これは經典学者がこじつけた解釈であって、音韻学を知る者の言ではない。周徳清(号挺齋)は「陰」の字そのものが「空喉」であり、「陽」の字そのものが「堂喉」であることを見てこのように名付けたのであるが、単に例を挙げたにすぎず、その名称が理に適っているかどうかは明らか

かにしていない。要するに、法則さえ定まれば、名称などは人ごとにそれぞれ採用すればよいことである。それ故、「切韻声原」は「啞声」と「啞声」という名称で呼んでいる。「通」という字が「啞」であり、(それに対して)「同」という字がちょうど「啞」にあたる(4)。こうした命名のほう人が人にとってはわかりやすいからである。ちょうど印章について「陰文」・「陽文」などと言うよりも、「朱文」・「白文」と呼んだほうがずっとはっきりしているのと同じことである。高安(の周徳清)がこの説を提出し、更に、李登(字士龍)の『書文音義便考私編』がこの視点から字母を併合し(5)、呂坤(独抱)の『交泰韻』がこの区別を反切を立てる際に取り入れた(6)。これらはいずれも良いことであった。だが、まだ、どうしてそのようになっているのかのことでありを明らかにするには至らなかった。そして、郝敬(京山)は「平・上・去・入」の下に更にもう一つの声調があると論じ、例えば「崩・鞞・琫・不・幫」がそれであるとした(7)。しかしこれは音を字母に帰しただけのことにすぎない。それが必ず「幫」でなければならないということではできない。或いは「把」であろうが「奔」であろうがどれでもかまわないのである。「啞・啞・上・去・入」のほうはずっと自然で安定している。『西儒耳目資』は「清・濁・上・去・入」を五声としており、正しく「啞・啞・上・去・入」と暗に一致している考え方だ。考えるに、五音が「相生」する場合の順序は「宮・徵・商・羽・角」であるが、既に生じた後は「宮・商・角・徵・羽」となり、この順にその声は漸次高くなる。人の言葉に見られる「啞・啞・上・去・入」もまた自然な音の「宮・商・角・徵・羽」(と同じこと)なのだ。「唇・舌・牙・齒・喉」は、最初にその位置が配され呼び名が立てられた際の「羽・徵・角・商・宮」である。「啞」から始まり「啞」によって終わるとするのは、郝敬(京山)の考えである。京山は「啞・啞」を言わず、別に1字を増やしたのであるが、蛇足のように見える。近年『中原韻』を翻刻した者があって、強いて「上・去・入」にもそれぞれ「陰・陽」の区別があるとしている(8)が、彼の言うところでは呼気の送り方や力の入れ方に違いがあるのだという。もしそうであるならば、平声にも気の送り方や力の入れ方によって自ずと「啞喉」と「啞喉」の「陰・陽」があるという現象をどのようにして処理しようというのか。故に例を立てて「啞・啞」と言うとするれば、それなら「上・去・入」に果たして「啞声」と「啞声」が存在するか。そのようにつきつめてゆけば、事は明かになるであろう。ただ、入声にだけは「起・抑」の声があって、地域によって状況が一定しない。例えば「莫」・「没」・「佛」・「合」等の字はみな、「起」でも「抑」でも任意であるし、古人の残した文献にあたってみても、押韻でも区別されず、反切にも証拠は見られず、歌謡や箋註を広く探ってみても、証明するに足るような記述が見あたらない。しかし今日の発音を調べてみると、確かにこのような音があり、開口と齊齒の韻は「抑入」に終わり、合口の韻は「起入」で終わるのである(9)。けだし、入声というのは声調の極まったものであり、声もまた極まれば転じようとするので、転じて再び平声になるのだ。「黄鍾」の律は「子」の位置に位し、「子」から左に巡回してゆく。周の「十二律」は、万物を貫く循環の原理に基づき、止まることなく巡ってゆく、必然の理

なのである(10)。総じて、「仄声」には「余声」がない。「余声」はすべて平声である。そのことから、五音がみな「宮」であり、五声がみな「平」であると悟ることができる。故にひとり「平声」にのみ「啞・啞」があるので、「仄声」にも「陰・陽」があるというのは臆説である。私中履が思うに、「啞平」には更に2つの声調があるようだ。例えば「逢・長・来・茶」の類の字は、現在の中州・呉下や私の故郷の音ではみな「啞平」よりも高い(11)。(子供が生まれた時に泣くおぎゃあという声は、その音が実際に「啞平」よりも高い。これは万国共通の現象であり、たんに中州・呉下や敝郷の方言音がそうであるだけではない。)ただ文字に書き表せない音があつて、その発音は「啞」である。ちょうど、入声の「起」声が字を持たない場合、その字が「抑」入であるのと同じことである。従つて、3種類の「平」と「上」と「去」と2種類の「入」を合わせて全部で7種類の声調があるのだ。ただしその作用においては5種類の区別を用いているのみである。そういうわけで「啞・啞」の理はわきまえておかざるを得ない。

## II 注

(1)『中原音韻』の作者である元の周徳清(1277~1365)は、字を日湛、号を挺齋と言ひ、江西高安暇堂(現在の江西省高安県内)の人である。『中原音韻』は、各韻部を更に声調毎に区分する際、平声には、陰平調と陽平調の2つの調の区別を設けている。また入声を設けず、「入作平」・「入作上」・「入作去」の所謂「入派三声」を表示していることも画期的な編集方針であつた。なお、後の部分で述べられているように、「陰」という字そのものの発音が陰平の声調を持っており、「陽」という字そのものの発音が陽平の声調を持っている。そのため、周徳清は平声の2種類の区別を「陰陽」の語を借りて命名したのだと、方中履は考えているようである。

(2)「『清・従・心・邪』が同列に並べられている」とは、「清」と「従」はもはや声母によって区別されるのではなく、「清」は陰平、「従」はその陽平という声調の違いによって区別され、「心」と「邪」も然りという考え方をしているものと思われる。また「『澄』の反切が『持蒸切』である」というのは、「澄」が澄母ですなわち陽平であるのに対し、反切下字の「蒸」は章母の字だから陰平であつて、声調の陰陽が合わず、反切下字が正しく声調を表示できていないという判断に基づいた批判であろう。

(3)張世南は字を光叔といい、本籍は鄱陽の人、南宋の寧宗(在位1195~1224)から理宗(在位1225~1264)の間に生きたと見られ、遺した著作として『游宦紀聞』が有名であるが、ここで「経生附会之談」と非難されている説は、『游宦紀聞』巻九の次の記述を指すものと思われる。

「字聲有清濁，非強爲差別。夫輕、清爲陽，陽主生物。形用未著，故字音常輕。重、濁爲陰，陰主成物。形用既著，故字音必重。如衣施諸身爲「衣」，冠加諸首爲「冠」。「衣」與「冠」讀作平聲者，其音重。已定之物，屬乎陰也；讀作去聲者，其音輕。未定之物，屬乎陽也。物所藏曰「藏」，

人所處曰「處」。「藏」平聲，「處」上聲者輕，其作去聲者皆重，亦其類也。」

これら「衣」・「冠」・「藏」・「処」等の字の声調を読み分ける事例は、所謂「四声別義」の現象に属するものであるが、張世南はそれを陰陽の原理で説明し、我々のいうところの名詞に属する意味を持つ場合は「已定之物」であるので「陰」に属し、音は「重」い。反対に動詞に属する意味を持つ場合は「未定之物」・「形用未著」であるので「陽」に属し、音は「軽」いと解釈している。従って、同じ去声でも「衣」・「冠」の場合は「陽」で「軽」く、「藏」・「処」の場合は「陰」で「重」いことになる。同様に、同じ平声でも「衣」・「冠」の場合は「陰」で「重」く、「藏」の場合は「陽」で「軽」いことになる。つまり、この説に拠れば、声調の種類と陰陽・軽重が固定的に対応しているわけではないことになる。

(4) 「通」は『広韻』で平声東韻透母一等の音、「同」は平声東韻定母一等の音を持っている。北方語では中古の平声全濁声母は陽平の次清声（無声有気音）母に変わっているので、方中履は「通」と「同」の字音は同じ声母で、ただ声調が平声の陰であるか陽であるかの違いしかないと考えているのだろう。

(5) 方中履は「釈疑」第4節「字母増減」の条でも『書文音義便考私編』の字母説に言及している。明の李登（字士龍、号如真 上元の人=現南京市江寧県）は梅膺祚の『字彙』巻末に掲載されている「韻法横図」の作者李世沢（字嘉紹）の父。その著『書文音義便考私編』は、平声に三十一字母、仄声に二十一字母を立てる独特の方針で編集されている。これは三十六字母から「非・知・徹・澄・孃」の5母を廃した上、旧全濁音節が平声で陰陽の2調に分岐していることを反映させて、平声においては全濁音の字母を残し、仄声についてはそれを省いたのである。巻首の「書文音義便考私編目録」では次のような解説がなされている。

#### 「平聲字母

見 溪 羣 疑 曉 匣 影 喻（此八字爲一類、皆喉音。）

敷 奉 微（此三字爲一類、乃脣齒半音。）

邦 滂 平 明（此四字爲一類、皆脣音、内平字舊係並字。）

端 透 廷 尼 來（此五字爲一類、皆舌頭音、内廷字舊係定字。）

照 穿 牀 審 禪 日（此六字爲一類、正齒音。）

精 清 從 心 邪（此五字爲一類、皆齒舌半音。）

共三十一母、舊多知徹澄孃（即娘字）非五母、知重照、徹重穿、澄重牀、孃重尼、非重敷、重母下字、無非同音、不知其說、茲用三十有一而足。

#### 辨清濁

清濁者、如通與同、通清而同濁、荒與黃、荒清而黃濁、是也。三十一母中、見邦端照精五母、皆有清而無濁、疑微明尼來日六母、皆有濁而無清、除此十一母外、其餘溪與羣、曉與匣、影與喻、敷與奉、滂與平、透與廷、穿與牀、審與禪、清與從、心與邪、十項、皆一清一濁、如陰陽夫婦之

相配焉。然惟平聲不容不清濁、仄聲止用清母、悉可該括、故並去十濁母、以從簡便。

#### 仄聲字母

見溪疑曉影 奉微邦平明 端透尼來

照穿審日 精清心

共二十有一而足。」

なお、李登の字母説は、父方以智の「切韻声原」において、下記のように既に言及がある。

「張洪陽定二十字、李如眞存影母、括二十一字、謂平有清濁、仄唱不用、故以清兼濁、此即指啞陰啞陽也。」

(6) 本文は「泰交韻」となっているが「交泰韻」であろう。『理学叢書』所収『呂坤全集』の「前言」によると、明の呂坤（1536～1618）は、河南寧陵の人、字は叔簡、号新吾、晩年に抱独居士、了醒亭居士と号した。その著『交泰韻』は、反切の用字法を改良した事例としてしばしば言及される著作であり、入声の字の反切には平声の上字を、平声の字の反切には入声の上字を用いなければならないとした点が最も有名であるが、ここで取り上げられているのは、『中原音韻』の「陰陽」、「切韻声原」の「啞啞」にあたる、平声の陰陽調の区別のことである。『交泰韻』では、全体を「東」から「尤」の21韻に分け、それぞれの韻の内部をまず「陰」と「陽」に大別して清声母と濁声母を配し、各声母毎に「平・上・去・入」の音節を（反切つきで）列記するという形式の韻書である。そこで、例えば第一の「東」韻では、「東董動篤」・「通統痛秃」は東韻「陰」に見え、「同桶働獨」や「隆壘○戮」は東韻「陽」に見えるという案配になっている。巻首に掲載されている「交泰韻凡例」の記述の中では、次のような部分がこれに関連すると考えられる。

「一、辨體裁 ……。切用兩字切一字，以上字爲子，下字爲母，母一而已，子人人殊。子定音，母定聲。子分別字之七音，母會同字之一體。母者一韻之舟，子者一韻之舵。子有清濁，母有陰陽。余非好立門戶，不如此，則不得聲氣之元矣。」

「一、辨母字 陰陽之切，天地懸絕，其切一差，其字失真。平聲，如東韻「同」字，徒紅切是已，而「通」字他紅切，是陰用陽母，仍讀如「同」矣，「通」宜改他翁切爲是。入聲，如陌韻「釋」字，施隻切是已，而「石」字裳隻切，是陽用陰母，仍讀如「釋」矣，「石」宜改裳直切爲是。至於質韻之「勿」爲陰，「拂」爲陽，而「勿」以文拂切，「拂」以敷勿切，是陰陽交錯，尤不照管。余上下兼訂，不敢分毫紊亂，審音者詳之。」

2番目の条では、平声のみならず入声にも陰陽を区別すべきことが説かれている。

(7) 明の郝敬（1558～1639）は、字仲輿、号楚望、楚の京山（現在の湖北省京山県）の人である（『明史』・『明儒学案』による）。郝敬の著作のうちで韻書といえる体裁のものに『讀書通』巻之二「五声譜」があり、筆者は曾て、尊経閣文庫が所蔵する叢書『山草堂集』所収の『讀書通』を閲覽し、初歩的な調査結果を小論「郝敬『五声譜』研究序説」にまとめたことがあるが、それによれば、「五声譜」からうかがえる郝敬の五声の説の内容はざっと次のようなものであった。

そもそも『読書通』は古典籍に表れる文字の通用現象を字音の通転という観点からまとめた字書形式の書物であるが、巻首の「五声譜」は、体裁上は『中原音韻』とよく似た（音注・義注のない）文字表形式の韻書である。全体は5種類の声調「宮声」・「商声」・「角声」・「徵声」・「羽声」に分かれ、それぞれの「声」の内部が更に12個ずつの韻に分かれている。但し、最後の「羽声」とその所属韻は実質上「虚設」に近く、韻目があるのみで、所属字が全く掲載されていない。「羽声」を除いた他の「声」、すなわち「宮声」・「商声」・「角声」・「徵声」は、各の所属字から考察して、それぞれ平声、上声、去声、入声にあたると思われる。

それぞれの「声」の所属韻の韻目を一覧表にしてみれば下記の通りである。

宮声	同	遲	危	虞	孩	沈	田	調	摩	邪	彊	求
商声	統	齒	偉	語	海	逞	忝	窈	麼	寫	穠	白
角声	洞	穉	魏	遇	害	趁	簞	眺	磨	謝	絳	舊
徵声	篤	徹	號	月	黑	質	鐵	滌	末	褻	甲	屈
羽声	東	志	屋	藥	汗	眞	天	殿	禡	削	鑑	鳩

但し、入声にあたる「徵声」の韻に次のような「通」関係が注記されており、他の韻に「通」じるとされるこれらの韻には所属字もなくただ韻目が設けられているのみなので、入声韻は実質上「篤」・「徹」・「質」・「末」・「甲」・「屈」の6韻しかないことになる。

徵声 「三號 與徹通」「四月 與徹通」「五黑 與徹通」「七鐵 與徹通」  
「八滌 與質」「十褻 與徹通」

そして第5の声調「羽声」は声調そのものが「虚設」、或いは別の規準を導入して設置されたものであり、12個の韻に所属字は全くない。そして、「羽声」の12の韻目の下には、たいへん難解な「通」関係が注記されている。

羽声 「一東 與同通」「二志 與穉通」「三屋 與屈通」「四藥 與末通」  
「五汗 與炭通」※「六眞 與沈通」「七天 與田通」「八殿 與簞通」  
「九禡 與磨通」「十削 與末通」「十一鑑 與簞通」「十二鳩 與求通」  
（※ 筆者注：「読書通目録」部分の表示では「炭」ではなく「簞」に作る。）

「五声譜」の内に見える記述は以上であるが、ほかに、『読書通』巻之一「四韻糾謬」に次のような一節があって、詳しく自身の「羽声」説を説明している。

「凡宮聲五轉生羽。①宮低羽高。故平聲爲宮。平而下。則宮也。平而上。即羽也。沈韻以東冬爲平。不知東冬本羽聲。以爲平。則東當作同。同統洞突東。同下平。而東與冬上平也。上平爲羽。聲高而輕也。下平爲宮。聲低而重也。江當作匡。而江爲羽。支當作遲。而支爲羽。眞當作稱。而眞爲羽。文當作焚。而文爲羽。元當作玄。而元爲羽。先當作遷。而先爲羽。蕭當作歛。而蕭爲羽。陽當作殃。而陽爲羽。庚當作坑。而庚爲羽。青當作情。而青爲羽。蒸當作沈。而蒸爲羽。羽浮而宮湛也。②今混以羽爲平。而分上平下平。謂平有高低乎。不知既謂平。則高者即不平。高而浮。即羽矣。又烏得謂之平。然則所謂下平者。本皆宮也。今不以爲宮而分上下。豈以前後篇目。爲上下乎。抑以聲音高低。爲上下乎。如以前後篇目分上下。則江與陽。眞與庚蒸。文與青。元與先鹽。刪與覃。寒與咸之類。前後重復混雜。上可爲下。下可爲上。如以聲音高低爲上下。則東冬江支微灰眞文元之類。爲上平可也。其魚虞齊佳寒刪等。皆下平。可以爲上乎。先蕭陽青蒸庚等。皆上平。可以爲下乎。③其肴豪歌麻之類。雖下平。然聲五轉後。或平或仄。隨協皆可。如肴曉孝學梟。梟雖平聲。若肴曉孝學悻。悻又上聲。若肴曉孝學獻。獻又去聲。若肴曉孝學隙。隙又入聲。如豪昊號霍蒿。蒿雖平聲。若豪昊號霍虎。虎又上聲。若豪昊號霍嚇。嚇又去聲。若豪昊號霍赫。赫又入聲。歌麻又可推矣。豈得謂平定還平。遂分上下。限四聲乎。牽強斂戾如此。余故謂沈韻不可信。不待知者而知也。」

この叙述の中では、韻目や例字が掲げられているので、それらの文字の発音からいくらかの推測ができそうである。便宜上、上記の引用のごとく、全体を①・②・③の3つの部分に分け、①の部分から見ると、第1の声調「宮声」は方以智らの「啞」すなわち陽平調であって、最後の「羽声」が、不足するところの「啞」すなわち陰平調を補うものであるかに推測したくなるのであるが、彼の挙例を子細に見ると、「全清」字対「全濁」字といったすっきりしたペアばかりではない。

羽声（上平声。高くて軽い。）	宮声（下平声。低くて重い。）
東（端母 全清）冬（端母 全清）	同（定母 全濁）
江（見母 全清）	匡（溪母 次清）
支（章母 全清）	遲（澄母 全濁）
眞（章母 全清）	稱（昌母 次清）
文（微母 次濁）	焚（奉母 全濁）
元（疑母 次濁）	玄（匣母 全濁）
先（心母 全清）	遷（清母 次清）
蕭（心母 全清）	歛（清母 次清）
陽（以母 次濁）	殃（影母 全清）
庚（見母 全清）	坑（溪母 次清）
青（清母 次清）	情（從母 全濁）

蒸 (章母 全清)

沈 (澄母 全濁)

しかも、③の部分の叙述を見ると、郝氏は、羽声は平声に転じると限ったものではないとさえ言っている。「肴曉孝学」の四声に対応する第五声、「豪昊號霍」の四声に対応する第五声の音としては、それぞれ異なる声調を持つ4つの音があり得るらしい。

・「肴 (肴韻匣母) 曉 (篠韻曉母) 孝 (效韻曉母) 学 (覺韻匣母) 梟 (平声蕭韻見母)」

「肴曉孝学悻 (『集韻』 下耿切：上声耿韻開口匣母)」

「肴曉孝学獻 (去声願韻開口曉母)」

「肴曉孝学隙 (入声陌韻三等開口溪母)」

・「豪 (豪韻匣母) 昊 (皓韻匣母) 號 (号韻匣母) 霍 (鐸韻合口曉母) 蒿 (平声豪韻曉母)」

「豪昊號霍虎 (上声姥韻曉母)」

「豪昊號霍嚇 (去声禡韻二等開口曉母・入声陌韻二等開口曉母)」

「豪昊號霍赫 (入声陌韻二等開口曉母)」

そもそも「五声譜」の「羽声」の韻目からして平声のみではないし、平声でなければ去声か入声であるが、いずれも同声調の韻との「通」関係が注記されているので、「羽声」は「宮声」の韻とのみ「通」であるのではないこともわかる。

結果的に、上掲の小論では、彼の五声説について次のようなまとめをするに止まった。

「以上をまとめて、甚だ精密を欠くけれども、考察の端緒を求めるとすれば、次のようなものであろうか。すなわち、『切韻系韻書』等から継承された四声の他に、第5の『羽声』があるという郝氏の考えは、上の『東』対『同]、『真』対『沈]、『天』対『田]、『鳩』対『求]のペアが暗示するように、一方で、平声における陰陽調の分裂という現象や当時提唱されていた五声説を踏まえてはいた。しかし、『讀書通]が解説するような文字の通用における字音の通転現象とそれとがいつしか関連させられてしまい、方中履の批判するごとく、どんな音にも自由に变化可能(文字の通仮に関する観察から導き出された一定の制限範囲が想定されているのかもしれないが)という内容へとすり替わってしまったのではなからうか、ということである。なお、郝氏が『詩経]の押韻箇所を読むにあたって協韻説に類似したものを操作していることは『毛詩原解]の音注などから推察できるので、協韻説の影響もあるかもしれないと思う。」(p.60)

なお、「釈疑]が掲げる「崩・鞞・琫・不・幫」という一連の字については、その典拠が郝氏のいずれの著作であるのか、筆者はまだつきとめていない。

(8) 趙蔭棠『中原音韻研究] (卷上 第五章「曲韻派」(二)「陰陽字面之復活與變本加厲」)、何九盈『中国古代語言学史 (新增訂本)』等によれば、『瓊林雅韻]・『棗斐軒詞林要韻]・王文璧の『中州音韻]等でいったん消滅させられた平声の陰陽調の表示は、次のような諸韻書において復活させられ、更に平声以外の声調にも及んでいったという。

明代の曲韻書においては、葉以震の『 (重訂) 中原音韻] が「王文璧で失われた周德清『中原音

韻』の平声の陰陽区分を復活させ」た（鈴木勝則「明末清初の論曲書における『中州音韻』及び『（重訂）中原音韻』音注の利用」p.20）ほか、范善濤（字昆白）の『中州全韻』が更に去声に陰陽の区分を設けた。「統修四庫全書」第1747冊所収の同書によると、各韻の内部を更に声調によって区分している、その声調名表示から判明する声調の種類は「陰平声」・「陽平声」・「上声」・「陰去声」・「陽去声」の5種であるが、鼻音韻尾を持たない所謂陰類の韻においてはこれに「入作～声」の表示が挿入されるので、全体で「陰平声」・「陽平声」・「入作平声」・「上声」・「入作上声」・「陰去声」・「陽去声」・「入作去声」となっている。

清朝時代に入ると、王鵠の『音韻輯要』（「統修四庫全書」第1747冊所収本では『中州音韻輯要』）が同じように平声と去声を陰陽に分けている。上記「統修四庫全書」本及び2010年文化芸術出版社刊の影印本（乾隆甲辰1784『崑山咸徳堂蔵版』刻本を底本とする）によると、声調表示は「陰平声」・「陽平声」・「入声作平声」・「上声」・「入声作上声」・「陰去声」・「陽去声」・「入声作去声」で、「凡例」の中に次のような1則が見えている。

「一 周徳清去聲不分陰陽、遂致互混、如沈君徴度曲韻須知之精詳音律、亦尚宗周本、得范昆白分列二門、而心目豁然、洵爲詞壇首功也。」（文化芸術出版社版 pp.7～8）

沈乘麐の『韻学驪珠』（「統修四庫全書」第1747冊所収『韻学驪珠』・『曲韻五書』所収『韻学驪珠』）は上記の各書とは異なり、入声韻を独立させているが、入声の各韻の内部が更に「陰声」と「陽声」に区分されている。入声以外の舒声の韻における声調表示は「陰平声」・「陽平声」・「上声」・「陰去声」・「陽去声」の5種類であるが、その「上声」の表示の下には小字で「陰陽 合」と注記がなされており、更に小韻がそれぞれ「陰」・「陰陽」・「陽」と注記のある3つの種類に分けて配列されているので、実質的には上声にも陰陽の区別が試みられているのと同じである。なお、凡例に次のような3則がある。

「一 入聲不叶入各韻、而另別於後者、便於歌南曲者知入聲之本音本韻、不爲中原中州所悞、即歌北曲者亦便於查閱。

一 北曲中入聲字、俱依入聲韻中本音翻切下、北○○切或北叶○讀。

一 自古韻書皆不分陰陽。惟中原韻於平聲則分之、於上去聲則否。中州韻於平去二聲皆分、而上聲仍混。茲則雖不列開、而於上聲中分註陰上陽上與陰陽通用三法。」

また周昂（字少震）の『新訂中州全韻』（又名「増訂中州全韻」）は、平・上・去声の全てを陰陽に区分していることでつとに有名であるが、李新魁・麦耘編『韻学古籍述要』の「増訂中州全韻」の条によれば、同書は乾隆年間に此宜閣から刊行されており、編者の周氏みずから次のように解説を施しているという。

“周氏云：‘平声分阴阳遵徳清本（按指《中原音韻》），去声分阴阳参昆白本（按指明人范善濤《中州全韻》），上声分阴阳此宜閣定。’”（同書 p.365）

今回、京都大学人文科学研究所東アジア人文情報学研究センター所蔵の『新訂中州全韻』（乾隆56

年序昭文周氏此宜閣刊本)によって見たところ、同書「卷之一」の冒頭には、李・麦氏書が言う通り、「平聲陰陽遵德清本、去聲陰陽參崑白本、上聲陰陽此宜閣定、昭文周昂少霞氏輯」と題されており、本文各韻の声調区分とその表示は、「入作～声」が配される陰類韻の場合、次のようになっていた。

平声 陰	平声 陽	入作平声 陰	入作平声 陽
上声 陰	上声 陽	入作上声 陰	入作上声 陽
去声 陰	去声 陽	入作去声 陰	入作去声 陽

上記は、例えば鈴木勝則氏が「王文璧『中州音韻』は平声に陰陽区分を設けていないが、反切上字により清濁を区分している。また去声も清濁を区分をしている。」(『瓊林雅韻』について(上) 注15)・「平声の陰陽区分は已に周德清本や葉以震本で行なわれたが、去声を陰陽に分けたのは『中州全韻』に始まる。ただ実際は王文璧『中州音韻』ですでに大部分去声の清濁区分がなされており、葉以震『中原音韻』がその内実を受け継ぎ、范善濤『中州全韻』で正式に去声陰陽調の分離がなされたのである」(『明・范善濤『中州全韻』考』p.57)と言われる如き、「陰・陽」の表示や体裁上の声調区分をすることなく、ただ小韻の類別において清濁の区別がなされているような現象は視野に入れずに、声調表示として明らかに陰・陽の字面が見られる現象に限って見てきたわけであるが、その基準に沿えば、平・上・去声あるいは平・上・去・入声の全てに陰陽を区別する体裁の韻書は『新訂中州全韻』と『韻学驪珠』がそれにあたり、両書はどちらも清朝の乾隆時代になって刊行されたものと認められているので、康熙年間中に没した方中履が言う「近年『中原韻』を翻刻したもの」としては年代が後に偏りすぎている。方中履の生前、他にも平・上・去・入にそれぞれ陰陽の区別を設ける韻書があったか、そのように主張する学者がいたか、或いは、声調を表示せずとも、小韻の区別において厳然と清濁を区別し、清濁が異なれば声調も異なると主張する論書があったか、いずれにせよ、『韻学驪珠』や『増訂中州全韻』のような韻書を生み出す下地が、当時すでに存在していたのであろうと想像される。

(9) ここで「釈疑」は、平声以外に陰陽調の区別があることを否定しながらも、入声にだけは「起・抑」の声という区別が存在し、ただし地域によって状況が一定しないし、「莫」・「没」・「仏」・「合」等の字のようにどちらに発音してもよい場合もあると言っている。そして、開口と齊齒の韻は「抑入」に終わり、合口の韻は「起入」で終わるのだという。この説明に従えば、「起」・「抑」の区別とは、声母の清濁によって声調が分岐する一般的な陰陽調の区別とは別のもので、韻母が円唇の要素を帯びているか否かによって声調が異なるという現象であるように思われる。入声の陰陽分岐が一部の韻母において先に起こっている、分岐途上の現象と考えることもできるかもしれないが、それにしても、ある種類の韻母であれば、声母にかかわらず全て片方の声調であるというのが理屈に合わない。「釈疑」によると、「莫」・「没」・「仏」・「合」の4字等はそのどちらにも読まれるとされているが、これもまた、韻母の音色によってそのような中間的な状況がもたら

されているのだと見なしてよいのであろうか。ちなみに、この4字の『広韻』に見える字音は次の通りである。声母は明母・奉母・匣母であり、すなわち両唇の鼻音及び唇歯摩擦音、そして匣母は或いは零声母に変わっているかもしれない。

- 莫 入声鐸韻明母「慕各切」
- 沒 入声沒韻明母「莫勃切」
- 仏 入声物韻奉母「符弗切」
- 合 入声合韻匣母「侯閣切」

ちなみに方以智・方中履父子の本籍地である桐城の現代方言（『安徽省志 方言志』 p.106）では、鐸韻や咸摂一等見系は主母音が [o] になっている（「喝」:[xo55]、「磕」:[k<sup>h</sup>o55]、「薄」:[po55]、「落」:[no55]、「索」:[so55]、「各」:[k<sup>u</sup>o55]、「郭」:[ko55] 同書 pp.122~133）。「沒」・「仏」の字音は同書には見えないが、p.106の「韻母表」によると「物・勿」は韻母が [ue] であって、上記諸字とは一致していない。「釈疑」の記述は、もしかすると [o] 類の音が合口と開口の間中間的なものと認められている状況を表したもののなのかもしれないが、それが声調の調値に反映するという現象は筆者にはなお未詳である。

なお、「切韻声原」の韻図では入声字が陰陽兩類の韻撰に配当されているが、中古の宕・山・咸摂一等の入声が対応する舒声陰類の韻撰は「呵阿」撰で、韻図の第9図に現れる。今、下記の3論文を参考に、「切韻声原」第9図「呵阿」撰。第1欄から第3欄に所掲の舒声字と入声字の中古音における所属、及び同撰の推定音価について、各論文がどう表記しているかをまとめてみたところ、下記の表のようであって、やはり [o]・[ɔ] 類の主母音が現れている。

呵阿撰	韻図第1欄	韻図第2欄	韻図第3欄
舒声の所属字 (①による)	戈合一除微母知照組外 歌開一疑母端泥組及精組 字	戈合三曉母字（僅一字： 「靴」）	歌開一喉牙音字 戈合 一曉母來母字 麻開三 精母字（「嗟」）
舒声の所属字 (③による)	果開合一	果合三	果開一見・果一除見組
入声の所属字 (③による)	宕江開一二・山合一入		宕咸開一入
韻母の推定音価 (①による)	uo	io	o
韻母の推定音価 (②による)	uɔ	iɔ	ɔ

①張小英「《切韻声原》研究」（山東師範大学碩士學位論文）

②時建国「《切韻声原》研究」

③孫宜志「方以智《切韻声原》与桐城方音」

また、北方方言以外の方言における声調分岐の原理には、声母の清濁による陰陽調の他に、声母の無気有気の違いや、韻母の韻撰によって声調が分調する現象も存在するという。辛世彪『東南方言声調比較研究』は、「韻撰分調」は次のような形で出現すると述べている。

“ 东南方言声调演变中，影响声调变化的因素还有韵母，最明显的是入声韵。入声韵母对入声调类变化的影响是以中古韵摄为单位进行的，我们称之为韵摄分调。除了湘语以外，东南方言中闽粤赣徽吴平都有韵摄分调。从地域上看，都属于远离长江的远江地区；或在闽粤桂琼，或在浙赣腹地。

韵摄分调包括两类情况：一是以元音的长短为特征，长元音韵为一调，短元音韵为另一调。这种情况一般叫元音长短分调。另一种是直接以中古韵摄为条件，某些摄的字固定的读一调，另一些摄的字固定地读另一调。我们把两种情况的分调都叫韵摄分调。

元音长短分调实际上是一种韵摄分调。因为：(1) 有元音长短对立的粤方言和平话中，读为长元音的摄和读为短元音的摄是固定的，都是咸山宕江梗五摄的字读为长元音，深臻曾通四摄的字读为短元音，相应的声调也各不相同；(2) 粤语中区分上下阴入的方言，有的没有元音长短对立，但上下阴入的摄却丝毫不乱，依然是咸山宕江梗为一组，深臻曾通为另一组。这两种情况都按照中古韵摄来分类，但中古的韵摄是不分元音长短的。很明显，元音长短与声调高低变化是互相伴随的关系，元音长短变化不是声调变化的条件，中古韵摄才是声调变化的条件。

有时候中古的等第对声调变化也有影响，突出表现在梗摄开口三四等与二等字不同调。有些方言点梗摄开口三四等与上阴入同调，梗摄开口二等字与下阴入同调。个别方言点咸山摄一二等与三四等也不同调。这种情况下韵摄分调的大类仍没有变，我们把它还放在韵摄分调里。

中古韵摄对声调（入声）变化影响的方式因方言而异，韵摄分调的类型也因此各不相同。闽、粤、平话基本上是咸山宕江梗为一组，深臻曾通为另一组。客赣徽语有的是咸山宕江梗为一组，深臻曾通为另一组，有的是咸深山臻为一组，宕江曾梗通为另一组。因此，韵摄分调的具体条件是元音高低洪细与韵尾。从声调演变看，韵摄分调分两种情况：一种是分调后的声调共时对立，同时存在；另一种是分调后其中一个调类并入舒声调。”（同書 p.35）

ここで概括されている「韻撰分調」における韻撰の別れ方のパターンは「咸山宕江梗 対 深臻曾通」ないし「咸深山臻 対 宕江曾梗通」が主であって、他に「梗撰開口二等 対 同三四等」と「咸山撰一二等 対 同三四等」という2種類の等による区別の存在が紹介されているだけである。「釈疑」がここで言うような合口か否かで分かれるという類型は紹介されていない。しかし、韻撰による分調の例が入声の分調に主として見られるというのは、「釈疑」の言うところと符合する面がある。

(10) ここでは、声調体系において入声は声調の極限であり再び平声へ回帰する起点であるという循環的なとらえ方を、音律の十二律との類比によって立証しようとしていたものと思われる。

十二律の第一である「黄鍾」の律が十二支の「子」に対応し、「子」から左に巡回してゆくという説明であるが、「黄鍾」律が十二支の「子」であり十一月に対応するという解釈は、『淮南子』「天文訓」や『漢書』「律曆志」のような基本的な文献に見える。すなわち『淮南子』「天文訓」では「斗指子則冬至。音比黄鍾。」「(斗)指子。子者茲也。律受黄鍾。黄鍾者、鍾已黄也。」(楠山春樹氏校注の「新釈漢文体系」『淮南子(上)』によれば、ここの訓の「茲」ははぐくむ、「鍾已黄也」は陽気がすでに黄泉にあつまるの意であるという)と言われ、また、「凡十二律、……、黄鍾爲宮、宮者音之君也。故黄鍾位子。其數八十一、主十一月。」と述べられている。『漢書』「律曆志上」ではもう少し敷衍して「五聲之本，生於黄鍾之律。……。黄鍾：黄者，中之色，君之服也；鐘者，種也。天之中數五，五爲聲，聲上宮，五聲莫大焉。地之中數六，六爲律，律有形有色，色上黄，五色莫盛焉。故陽氣施種於黄泉，孳萌萬物，爲六氣元也。以黄色名元氣律者，著宮聲也。宮以九唱六，變動不居，周流六虛。始于子，在十一月。」と説いている。そしてこの「子」が元気の始動するところであることが例えば次のような叙述で説かれる。「太極元氣，函三爲一。極，中也。元，始也。行於十二辰，始動於子。……。此陰陽合德，氣鐘於子，化生萬物者也。」

さらに、「黄鍾」から十二律が生じてゆく過程が「左旋」という言葉は、例えば、宋の沈括の『夢溪筆談』巻五「楽律一」の次に引く一節(『筆談』の第84条)にも登場している。

「漢志：陰陽相生，自黄鍾始，而左旋，八八爲伍。八八爲伍者，謂一上生與一下生相間。如此則自大呂以後，律數皆差，須自蕤賓再上生，方得本數。此八八爲伍之誤也。或曰：『律無上生呂之理，但當下生而用獨倍。』二説皆通。然至蕤賓清宮生大呂清宮，又當再上生。如此時上時下，即非自然之數，不免牽合矣。自子至巳爲陽律、陽呂，自午至亥爲陰律、陰呂。凡陽律、陽呂皆下生，陰律、陰呂皆上生。故巳方之律謂之中呂，言陰陽至此而中也。至午則謂之蕤賓，陽常爲主，陰常爲賓。蕤賓者，陽至此而爲賓也。納音之法，自黄鍾相生，至於中呂而中，謂之陽紀。自蕤賓相生，至於應鍾而終，謂之陰紀。蓋中呂爲陰陽之中，子午爲陰陽之分也。」(胡道靜『夢溪筆談校証 上』p.216)

言うまでもなく、十二律の「相生」は、基準となる律長に三分の二をかけて次の律長を求めることを「下生」、四分の三をかけて次の律長を求めることを「上生」と言い、最初の基準となる「黄鍾」九寸から「下生」・「上生」を交互に繰り返して十二律の長さが決まってゆくとされているのであるが、『淮南子』の記述によって十二支の「子」から「亥」までに配当される十二律の「相生」のされかたを確認してゆくと次のようになる。『筆談』の区分によれば、次の律を「下生」するものが「陽律・陽呂」で、次の律を「上生」するものが「陰律・陰呂」である。そして前半の「子」から「巳」までが「陽律・陽呂」にあたり、陰陽がそこに至って「中」となるので「巳」の律は「仲呂」と呼ばれるのだという。後半の「午」から「亥」までは次の律を「上生」するので「陰律・陰呂」である。但し、「午」にあたる「蕤賓」は、自身が「亥」の「應鍾」から「上生」して出てきたにもかかわらず、再度「丑」の「大呂」を「上生」して次に続けてゆくのであ

り、「下生」・「上生」を交互に繰り返してきた流れがここにおいてだけ規則を乱して、十二律の生まれ順に注目して見れば、「蕤賓」こそ十二律の「相生」の折り返し地点のようでもある。

子	11月	黄鍾		林鍾を下生	五音の宮にあたる
丑	12月	大呂	蕤賓より上生し、夷則を下生		
寅	1月	太簇	林鍾より上生し、南呂を下生		五音の商にあたる
卯	2月	夾鍾	夷則より上生し、無射を下生		
辰	3月	姑洗	南呂より上生し、応鍾を下生		五音の角にあたる
巳	4月	仲呂	無射より上生		
午	5月	蕤賓	応鍾より上生し、大呂を上生		
未	6月	林鍾	黄鍾より下生し、太簇を上生		五音の徴にあたる
申	7月	夷則	大呂より下生し、夾鍾を上生		
酉	8月	南呂	太簇より下生し、姑洗を上生		五音の羽にあたる
戌	9月	無射	夾鍾より下生し、仲呂を上生		
亥	10月	応鍾	姑洗より下生し、蕤賓を上生		

「釈疑」に見える「左旋」の語については、梅原郁訳注『夢溪筆談 1』（東洋文庫344）の注が、「ここで言う（左旋）は現在の用法と反対。」と述べており（同書 p.109）、さらに本文の「八八為伍」の意味について「基本になる黄鍾の九を三分の二倍すると林鍾六が下生する。これは右まわりでいって八番目にある。次に林鍾の六を三分の四倍すると太簇八が上生する。これも右まわりでいって八番目にあたる。」と説いている（同書 p.109）。これに従えば、「左旋」とは、北の「子」の位から時計回りに回ってゆく運動を指しているように思われる。ところが『夢溪筆談』には、他にも「左旋」の語を用いる叙述が見える。すなわち次の第103条（やはり巻五「楽律」一）である。

「六十甲子有納音，鮮原其意。蓋六十律旋相爲宮法也。一律含五音，十二律納六十音也。凡氣始於東方而右行，音起於西方而左行，陰陽相錯，而生變化。所謂氣始於東方者，四時始於木，右行傳於火，火傳於土，土傳於金，金傳於水。所謂音始於西方者，五音始於金，左旋傳於火，火傳於木，木傳於水，水傳於土。……。」（『夢溪筆談校証 上』 p.247）

この記述によれば「十二律」ではないがそれと組み合わせる「六十音」を形成するところのもう一つの基準である「五音」は、「金」から始まって「火」→「木」→「水」→「土」の順序で伝わるとされており、季節では秋、方位では西に配される「金」から、夏＝南の「火」へと行き、更に春＝東の「木」、冬＝北の「水」、最後に中央の「土」に行くわけだから、「五音」については、逆に時計と反対回りの順序で回ることになっている。上掲の梅原郁氏の注でもここは同様に

解されており (p.135)、これに従えば、「左旋」の方向に『筆談』の「楽律」の章で2種類の意味付けがあることになる。また方以智の『通雅』十二「天文・陰陽」に次のような文言が見えていて、

「音起于西商，故納音甲子首金，猶六十律旋相爲宮法也。凡氣始于東方而右行，音起于西方而左行，陰陽相錯而生變化。所謂氣始東方者，四時始于木，右行傳火，火傳土，土傳金，金傳水。所謂音始西方者，五音始金，左旋傳火，火傳木，木傳水，水傳土。……。」

直接「十二律」に関する話題ではないとはいえ、『筆談』の「五音」の相生に関する解釈が引用されていることには注目すべきだろう。

(11)「啞平」すなわち陽平声に、調値が「啞平」より高いものと、そうでないものとの2種類が存在するという観察がなされている。「啞平」より高い音調を持つ字として例に挙げられている4字は『広韻』では次のような音を持っており、舌上音澄母と軽唇音奉母、次濁音の来母の字が交じって挙げられていることがわかる。

逢 平声鍾韻奉母「符容切」  
長 平声陽韻開口澄母「直良切」  
    上声養韻開口知母「知丈切」  
    去声漾韻開口澄母「直亮切」  
来 平声哈韻来母「落哀切」  
茶 平声麻韻開口澄母二等「宅加切」

「釈疑」はこの現象が「中州」・「呉下」・「敝郷」の音に見られると述べている。一般的な解釈に従って、前2者が河南、蘇州のことだと考え、かつ「敝郷」とされているのが桐城のことだと考えれば、北方官話（中原官話）・呉方言・江淮官話のそれぞれに同様の現象が分布すると言われていることになる。まず現代の安徽省桐城県の方言を見ると、『安徽省志 方言志』によれば、桐城方言は同書の言う「皖中江淮方言」に属し、その声調は、陰平声が下降調の31、陽平声が上昇調の24であって、陽平のほうが陰平よりも高いと形容することが或いは可能かもしれない調値を持っている。そして周辺の方言を見わたすと、下記のように、陽平声の調値のほうが陰平声よりも高いと言えそうな地域が多く存在している（同書 p.109「声調表」）。

安慶市	陰平	31	陽平	35
蕪湖市	陰平	31	陽平	35
宣州市	陰平	31	陽平	35
巢湖市	陰平	21	陽平	35
滁州市	陰平	21	陽平	35
淮南市	陰平	213	陽平	45
懷遠	陰平	212	陽平	55

ただし、貴池市は例外で、陰平が44、陽平が24である。ただし、同書が報告するこれらの地域において、陽平声が2つの調に分岐しているわけではない。「釈疑」の記述は、もしかすると、陽平声が陰平声よりも低い調値から高い調値へと変化する過渡的な状況を記録しているのかもしれないが、現段階では筆者の憶測に過ぎない。また並んであげられている呉語であるが、錢乃栄『現代呉語研究』が掲載する現代の呉方言の声調調値を見ると、単字調では、蘇州において陰平が44、陽平が223である（同書 p.38）のを始め、調査地点のほぼ全部で陰平声が高く陽平声が低く、桐城方言のような特徴は見られない。さかのぼって趙元任『現代呉語之研究』の段階でもほぼ同様であるが、無錫・蘇州（呉県）・常熟の音について両書が記載するところを比べると、記録された調値は下記のものであって（趙書pp.76～77、錢書pp.36～39）、

	趙元任	錢乃栄
無錫	陰平 53 <sub>b</sub> 陽平 15 <sub>b</sub>	陰平 544 陽平 323
蘇州（呉県）	陰平 44 <sub>#</sub> 陽平 14 <sub>1</sub>	陰平 44 陽平 223
常熟	陰平 51 陽平 12	陰平 52 陽平 233

趙書の記録のほうが、陰平が下降調（ただし呉県はそうでないが）、陽平が上昇調であるという特徴をより顕著に表しているようである。また、錢書が報告する蘇州の連続調形式では、同書の言う「上海型」に属し、前字の声調が後続の音節を覆盖してしまい連続調が単音調と同じになってしまう「延伸型」であるが、陽平声の後続音節を持った場合、22+44か24+31（後続音節が入声であれば22+4と24+2）の2種類の調子が出現する（同書 p.635）。なおこの現象は宮田一郎・許宝華・錢乃栄編著『普通話対象 上海語・蘇州語 学習と研究』では、2音節群の連続変調の「広用式」にあたりとされ、陽平声の単字調調値は13、2音節群の第1音節に位置した場合は、A型が22+44、B型が23+21であるとされている（同書 p.41）。ただし、蘇州方言では2音節の連続調はいくつかの型に収斂するので、同じ調子は他の声調の組み合わせにおいても現れている。

さらに、中原官話方言における陰陽平の調値を侯精一主編『現代漢語方言概論』の「官話方言41片62代表点調類、調値比較表」（同書 pp.38～39）によって見てみると、中原官話区の方言のうち陰陽平を区別する9地点の調値は次のようになっている。

	陰平	陽平
鄭州	24	42
曲阜	213	53
洛陽	34	42
信陽	33	53

洪洞	21	24
新絳	53	325
万榮	51	24
西安	21	24
宝鷄	21	24

これらの地点では、北京方言などと違い、陰平声の調値が低いところが多いので、陰平声に5の高さが表れる。新絳・万榮等を除いて、陽平声は陰平声より高いかせいぜい拮抗する高さにあると言ってよさそうだ。そして調型においては、鄭州・曲阜・洛陽・信陽など河南省の諸地点では陽平は下降調を持っているが、より西北の諸地点では上昇調である。ことに洪洞、西安、宝鷄では陰平が低めの下降調、陽平が上昇調という桐城方言と似た特徴を持っている。ただしこれらの諸地点においても、陰平と陽平の調値がそのようであるというだけで、陽平調が更に分岐しているわけではないと思われる。

#### 4 おわりに

この節で方中履が次々に言及する当時の知見の数々は、時代性を反映するという点でいずれも興味深いものだが、『西儒耳目資』の五声説などを除き、後世に至ってほとんど忘れられた異説も多く交じっているようである。しかし、そうであるだけに、語の品詞性（現代の言葉で言えば）を「陰陽」・「清濁」を用いて表す『游宦紀聞』の説や、筆者などにとってはきわめて難解な『読書通』の五番目の声調、方中履自身が提唱する声調の循環的生成説など、その背景となる知識・思想とともにさらなる研究の必要性を示唆しているかのように感じられてならない。また、方言の声調調値に関する叙述も、筆者は今回じゅうぶんな理解がとどかなかったが、これもたいそう興味深いものである。

#### 参考文献

- 『中原音韻』元・周德清 2001 芸文印書館  
『游宦紀聞』南宋・張世南 「唐宋史料筆記叢刊」所収 1981 中華書局  
『書文音義便考私編』明・李登 電子版『全四庫系列・四庫存目書』所収  
『書文音義便考私編』明・李登 「統修四庫全書」所収  
『交泰韻』明・呂坤 『呂坤全集』（理学叢書）2008中華書局 所収  
『読書通』明・郝敬 『山草堂集』（前田育徳会尊経閣文庫所蔵）所収

- 『中州全韻』明・范善臻 「統修四庫全書」第1747冊所収
- 『音韻輯要』清・王鵠著 歐陽啓名編 2010 文化芸術出版社（乾隆甲辰1784『崑山咸德堂藏版』刻本影印）
- 『中州音韻輯要』清・王鵠 「統修四庫全書」第1747冊所収
- 『韻學驪珠』清・沈乘慶 「統修四庫全書」第1747冊所収
- 『曲韻五書』汪經昌輯 1965 1979再版 広文書局
- 『新訂中州全韻』清・周少霞 京都大学人文科学研究所東アジア人文情報学研究センター所蔵 乾隆五十六年序昭文周氏此宜閣刊本
- 『曲律』明・王驥德 『中国古典戯曲論著集成』（四）所収 1959・1982 中国戯曲出版社
- 『漢語音韻学』王力 1972 中華書局香港分局
- 『中原音韻研究』趙蔭棠 1984 新文豊出版社
- 『中国古代語言学家評伝』吉常宏・王佩増編 1992 山東教育出版社
- 『中国古代語言学史（新增訂本）』何九盈 2006 北京大学出版社
- 『韻学古籍述要』李新魁・麦耘 1993 陝西人民出版社
- 「明末清初の論曲書における『中州音韻』及び『（重訂）中原音韻』音注の利用」鈴木勝則 『中国語学』228号 1981 中国語学会
- 「明・范善臻『中州全韻』考」鈴木勝則 『中国語学』233号 1986 中国語学会
- 「『瓊林雅韻』について（上）」鈴木勝則 『中国語学』235号 1988 中国語学会
- 余時英「方中履及其「古今积疑」——跋影印本所謂「黄宗羲授書随筆」」『（国立中央図書館蔵本）古今积疑』（「雑著秘笈叢刊」11）卷首所収 1971 台湾学生書局
- 『方以智評伝』（「中国思想家評伝叢書」）羅熾 2001 南京大学出版社
- 「《切韻声原》研究」張小英 山東師範大学碩士學位論文 2002年4月
- 「《切韻声原》研究」時建国 『音韻論叢』（中国音韻学研究会・石家莊師範專科学校編）2004 齊魯書社
- 「方以智《切韻声原》与桐城方音」孫宜志 『中国語文』2005年第1期
- 『東南方言声調比較研究』辛世彪 2004 上海世紀出版集团・上海教育出版社
- 『淮南子（上）』楠山春樹校注（新积漢文体系第54卷）1979・1989 明治書院
- 『五行大義 下』中村璋八・清水浩子（新編漢文選8）1999 明治書院
- 『漢書』二十一上「律曆志第一上」後漢・班固撰 唐・顔師固注 中華書局評点本
- 『漢書 上卷』小竹武夫訳 1976 筑摩書房
- 『夢溪筆談校証 上』宋・沈括 胡道静校証 1987 上海古籍出版社（上下巻）
- 『夢溪筆談 1』沈括 梅原郁訳注（東洋文庫344）1978 平凡社
- 『方以智全書 第一冊 通雅』（全二冊）明・方以智 侯蓋廬主編 1988 上海古籍出版社

『安徽省志 方言志』安徽省地方志編纂委員会編 1997 方志出版社  
『現代呉語研究』錢乃榮 1992 上海教育出版社  
『現代呉語的研究』趙元任 1968 大華印書館  
『普通話対象 上海語・蘇州語 学習と研究』宮田一郎・許宝華・錢乃榮編著 1984 光生館  
『現代漢語方言概論』侯精一主編 2002 上海世紀出版集團・上海教育出版社  
「郝敬「五声譜」研究序説」富平美波 『アジアの歴史と文化』（山口大学アジア歴史・文化研究会編）第十輯 2006.3

【本稿は、科学研究費補助金（基盤研究（C））『「切字釈疑」訳注』（20520388）の助成を受けた研究成果の一部である。】

（富平美波：山口大学人文学部教授）